

9月下旬播種におけるエンバク極早生品種・系統の生育特性

○桂真昭・我有満・後藤和美・松岡秀道

(九州沖縄農研)

【目的】

エンバク極早生品種を用いる夏播き栽培は西南暖地を中心に普及が進んでいるが、その播種適期は短く、播種作業は遅れる傾向にある。また、近年では播種適期とされる9月上旬の天候が厳しく、適期播種を行っても発芽や出穂性に影響を及ぼし、生育の安定性に欠ける場面もみられる。その一方、播種期を遅らせることは、冬季に向かう栽培期間を考えると、より条件の良い生育期間を短縮することになり、減収につながるとされている。そのため、本課題では、播種適期より遅く播種した場合の既存品種や育成系統の生育特性を検討した。

【材料および方法】

表1の8品種・系統を供試した。2004年9月28日及び2005年9月30日に播種し、それぞれ2004年12月20日、2005年12月26日に収穫調査を行った。1年目は1プロット6.0㎡(条長4m×条間0.3m×5列)、播種量を6kg/10aとし、2年目は1プロット4.5㎡(条長3m×条間0.3m×5列)、播種量を200粒/㎡とした。施肥量は両年とも、基肥としてN、P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>、K<sub>2</sub>Oを成分でそれぞれ0.5、1.0、0.5kg/a、追肥としてN、K<sub>2</sub>Oを成分でそれぞれ0.5kg/aを播種約1ヵ月後に施用した。試験区は3

反復、乱塊法で配置した。なお、比較のため、播種適期内の9月上旬に播種した場合の調査結果も示した。

【結果および考察】

表1に示したように、「九州13, 14, 15号」は9月上旬に播種した場合、既存品種より出穂が早い系統であり、その特性は9月下旬に播種した場合ではより顕著に発揮された。その結果、収穫時の出穂程度も既存品種より明らかに高くなり、9月下旬播種では出穂に関する品種・系統間差が拡大すると考えられる。収穫時の病害程度はどの供試品種・系統も低く、9月上旬播種よりも低い傾向にあった。草丈は9月上旬播種よりも短くなったが、「九州15号」はその減少程度が他のものより小さかった。乾物率は9月上旬播種より低く、生育ステージが進んでいないことを示している。乾物収量に関しては、「九州14, 15号」が多収を示し、9月上旬播種の場合と比較すると、減収程度は約30%であった。その一方、「たちいぶき」と「スーパーハヤテ隼」の減収程度は約50%に上った。したがって、9月下旬播種の栽培で相対的に多収で、その減収程度が低い品種・系統を選択することは播種適期の拡大につながり、夏播き栽培での安定性を高めるものと考えられる。

表1. エンバク極早生品種・系統の9月下旬播種における生育特性(2年間の平均値)

	出穂まで 日数	収穫時の			乾物率 %	乾物収量 kg/a
		出穂程度 1:無~7:極多	病害程度 1:無・微 ~9:甚	草丈 cm		
九州13号	62 (41)	6.0 (9.0)	1.5 (2.2)	85 (108)	17.7 (22.8)	47.0 (69.7)
九州14号	57 (40)	6.5 (9.0)	1.3 (2.0)	88 (113)	18.2 (23.6)	49.4 (71.8)
九州15号	61 (40)	6.3 (9.0)	2.0 (2.3)	96 (106)	18.0 (23.8)	54.8 (70.4)
九州16号	66 <sup>2)</sup> (46)	3.7 (8.7)	1.5 (2.0)	88 (111)	17.8 (19.8)	47.5 (70.9)
はえいぶき	70 <sup>2)</sup> (45)	5.0 (9.0)	1.7 (2.3)	94 (115)	16.0 (20.8)	46.6 (70.9)
たちいぶき	-1)2) (51)	1.5 (8.5)	1.7 (2.6)	75 (111)	15.9 (20.0)	37.8 (77.8)
スーパーハヤテ隼	74 <sup>2)</sup> (48)	2.5 (9.0)	2.2 (2.8)	100 (127)	16.7 (21.0)	43.8 (87.5)
たちあかね	72 <sup>2)</sup> (49)	2.8 (8.7)	1.5 (2.2)	83 (111)	15.3 (18.9)	43.3 (72.1)

括弧内は同年の9月上旬播種の平均値。

1), 2):それぞれ2004年, 2005年の12月中旬まで未出穂。